

# 大河ドラマのような人生

## 寄稿

bunka@nagasaki-np.co.jp

幕末の長崎ほど面白い時代はないかもしれない。実業家のグラバーやリンカー、写真師のベアトやロシエ、オランダ軍医のポンペやポードインなどが往来し、全国諸藩から精鋭たちがその知識や技術を学ぼうと長崎へ押しかけた。

医療の分野ではポンペが系統的な西洋医学教育を指導し、1861年、小島の丘(現在の長崎市西小島1丁目)にわが国初の西洋式病院「養生所」を創設した。ポンペの後任であるポードインの時代に「精得館」と名前を変えたが、全国から医学伝習に集う学徒はさらに増え続けた。

長崎大付属図書館(同市)に「精得館受業生十三士」と題された古写真がある。精得館で学んだ13人の志士たちの解剖学の勉強風景として、長崎の写真師上野彦馬が撮影した。中央で胸部の骨を右手でつかみ正面を見つめる男は、ポンペから蘭医学を学んだ著名な医師、松本良順の長男銈太郎である。だが、それ以外の人物については、ほとんどが不明だった。

私は長崎で15年間、医学



## 歴史(第3日曜日掲載)

## サンデーぶんか

長崎大名譽教授 森望

### 幕末志士たちの解剖学講義

生へ向けて神経解剖の講義と脳解剖実習を担当したが、3年前にその職を辞した。自由な時間が増えた中であら古写真が妙に気になった。松本銈太郎以外の12人はいったい誰だったのか? 新型コロナ禍で行動制限がかかる中、町の図書館や大学図書館に通えなかったが、そんな中でもネットは自由だ。文献や地域史の資料などもデータ化がずいぶん進んでいる。そのおかげ



「精得館受業生十三士」(長崎大付属図書館医学分館所蔵)

もりのぞむ 1953年諫早市生まれ。東京大薬学部卒。薬学博士。専門は脳科学、神経老年学。南カリフォルニア大助教授、国立長寿医療研究センター部長、長崎大医学部(第1解剖)教授、長崎大付属図書館長、日本老年学会理事などを歴任。現在、福岡国際医療福祉大教授。著書に「寿命遺伝子」(講談社ブルーバックス)、「明治の長崎撮影紀行」(長崎文献社)、翻訳書に「老いと健康の文化史」(原書房)、「オランダ絵画にみる解剖学」(東京大学出版会)など。

## 13人のその後が明らかに

### 古写真「精得館受業生十三士」

てきた。福井、沼津、松江、会津などの藩士や幕臣たちだ。ネットでの多くの資料からその後の人生も見えてきた。古写真の中の人々の人生を辿ってみると、そこから大河ドラマのような世界が広がってきた。

例えば、写真の左端に立つ男は半井元瑞(1847〜98年)。福井藩主松平春嶽の命で長崎で医学を学び、明治維新後に今の京都府立医大の病院長、学長から京都府医師会の初代会長になった。

松本銈太郎の左背後に立つ馬島清治(1848〜93年)は、会津藩士。ドイツ留学後、戊辰戦争を経て明治新政府の官僚となり、岩倉使節団に随行。ウィーン万博担当事務官を務め、後年は横浜の裁判所長になった。

写真中央左手にすっと立つ長身の男は山内徳三郎(1844年〜没年不詳)。幕臣で松本良順の従兄弟であり、長崎で語学と医学を学んだが、維新後は北海道開拓使で官僚として炭鉱の調査開発を担当し、後年新政府の鉱山局長にもなった。長崎の高島炭鉱の調査報告も取りまとめている。

ほかにも、今の東大や阪大の元の施設で教官となったり、郷里で蘭学塾を開いたり、県議会の副議長になった者もいる。多くが地域医療に貢献したことはいうまでもない。

古写真の「謎解き」から、13人のその後の人生物語を紡いだ原稿を日本解剖学会へ送った。その原稿は同学会の一般向けサイト「解剖学ひろば」(<https://www.anatomy.or.jp/hiroba/>)で公開されている。興味のある人は読んでみてほしい。